

## 指導教授推薦文

論文等テーマ 日本語の証拠性表現 ー証拠存在明示とソース明示ー

著者名 蔣家義

論者は日本語のモダリティ研究に少なくとも2つの問題点があると考えている。ヴォイス、テンス等の文法カテゴリーに比べ、関わる範囲が広すぎ、助動詞、文類型、動詞の活用、敬語、終助詞、とりたて助詞など幅広い研究テーマに及んでいること、そこから文法カテゴリー研究の扱う表現が助動詞、動詞の活用形、終助詞等々を含むというように多種多様であることの2つである。このようなことから、モダリティは日本語の文法カテゴリーの中でも異質な存在としてとらえられるとしている。(論者の提出予定博士論文より)

論者は日本語モダリティ研究の数多くの優れた研究成果に学びつつも、この時点である程度原点に立ち帰って日本語モダリティ研究のあり方につき再考・整理する必要があるとしている。

本論文では、日本語モダリティ研究では認識がなかったか、あってもそれほど明確に把握されていなかった「証拠性 evidentiality」の扱いについて一般言語学的な立場から論述を行っている。

日本語モダリティ研究では「ようだ」「らしい」「(し) そうだ」はしばしば「証拠性 evidentiality」の表現であるとしてとらえられている。しかし、論者は東ポモ語などには証拠のソースの種類を示す形式が存在することから、「証拠性」は2種類のものを区別しなければならないとしている。つまり、「証拠存在明示的証拠性」と「ソース明示的証拠性」である。日本語の「ようだ」「らしい」「(し) そうだ」は情報のソースについては特定しないので「ソース明示的証拠性」は持たず、「証拠存在明示的証拠性」を持っていることになる。

論者のこの考えは本論文集に掲載する価値があると考え、また識者のご意見を賜ることができれば本人の今後に資すること大であると考え、ここに推薦する次第である。

2010年10月25日

推薦者(指導教授) 今泉喜一

論文等テーマ 中国語形容詞の動態性に関する考察  
—「很+V/A+了」の構造における動詞との使い分け—

著者名 高立偉

論者は一貫して中国語形容詞の時間表現について考察を進めている。

形容詞は特に「很」などの副詞や「了」などの動態助詞と共に起るとき変化を表すことになるが、論者は形容詞の動態性を「変化」の発生とその後の状態持続にあるものと考えている。ここには開始と継続のアスペクトが見いだされる。また、その変化には階層性があり、温度、色（波長）、長さ、知識量などの一定の基準（ものさし）に基づく因子の増減によってその程度が示せるとしている。

動詞の動態性がすべてのアスペクトによって把握されることと、動詞の変化が階層性ではなく、スルカシナイかの両極性でとらえられることと比較して、形容詞の動態性には形容詞としての特性があるとしている。

従来、形容詞が「了」などと共起する場合に示す動態性については形容詞が動詞化したものであると考える説が一般的であったが、論者の考察は、近年提唱されはじめた、形容詞は動詞化しているのではなく、やはり形容詞のままそのような現象を生じているのであるとの説を支持する内容になっている。

論者はさらに、A B型形容詞のうち、 $A \neq B$ の場合は程度因子が固定されるため很等では修飾できないとし、これを「程度形容詞」と名付け、A B B、A B A B、A A B B型形容詞もこれに当たるとした。これは程度因子の増減を表すことはできないが、「了」とは共起して変化そのものを表すことができるとしている。

論者の現段階でのこのような考え方は本論文集に掲載する価値があると考え、またこの考え方の妥当性につき識者のご意見を賜うことができれば論者にとって貴重な指針となると考え、この論文集に掲載を推薦する次第である。

2010年10月22日

推薦者（指導教授） 今泉喜一

論文等テーマ 日本語の「 $N_1 + の + N_2$ 」の多義現象の研究  
—中国語の“ $N_1 + 的 + N_2$ ”との対照研究—

著者名 辛奕羸

論者は言語表現の持つ多義性を研究しており、本論文では日本語の「の」と中国語の「的」が引き起こす多義の原因について考察している。

「の」も「的」も論理関係にある2つの名詞を結んで表現するのであるが、その表現は話し手の発話時においては一義的であっても、聞き手が受容する段階で複数の論

理関係から解釈しなければならないことがあり、その際に二義、多義が発生する。論者はこの一般論を次のように深めている。

論者は結ばれる2つの名詞のあり方により多義の発生しやすい場合とそうでない場合とがあると考え、名詞を5種類に分け考察している。N<sub>1</sub>にある名詞の属性のうち、N<sub>2</sub>にある名詞により指示され、生かされる（特定化される）属性が単一である場合には一義となり、複数であれば二義、多義となるとした。

「の／的」は構造的に分析することもあるが、それにこのような意味による分析を加えることにより、理解をいっそう深めることができるものと考えられる。

本論文では主として「の／的」の共通する部分が論じられており、差異に関しては今後の課題となっている。

本論文をこの論文集に掲載することにより、識者のご指導を賜ることができれば、論者の今後の研究に弾みがつくものと信じ、ここに推薦する次第である。

2010年10月28日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一

論文等テーマ 再考：社説におけるハズワナイ文とハズガナイ文の研究  
— その構造と意味、文脈における機能、効果の相違に関する一考察 —

著 者 名 大水 利之

論者はこれまで社説（議論文）に用いられるハズダ、ワケダがどのような意味機能を持つかについて、論旨全体に視点を据えつつ、文脈との論理関係に注目して分析と考察を試み、その成果を発表してきた。

本論文においては、ハズダの否定形式「ハズワナイ／ハズガナイ」がどのような意味機能を持つかについて、同様の方法で分析・考察を行っている。

その結果、両形式はともに反道義的・可能性大と想定したコトを完全否定する働きを持つ一方、効果の点からは、ハズワナイは客観的判断によって同質化をめざしてトピックセンテンス化を行い、ハズガナイは道義性・可能性の主観的排除によって訴え、同質化をめざして先行文脈を収束する、との仮説を導き出した。

従来、「ハズワナイ／ハズガナイ」は、ハズダの単なる否定形式であると認識されるだけで、これが論旨・文脈においていかなる意味機能を持つかについて積極的に研究されることはなかった。論者のこの研究はこの状況を改善するものとなるであろう。また、論者はハズに代入可能な名詞群を設定して考察をしているが、これも注目に値する。モデル化の図示にも特徴がある。

論旨・文脈の中においてこのような形でとらえて考察することは、ハとガの研究に

別の視点から示唆を与えることにもなる。

本論文集に掲載することにより関係の方々の指導を受けることができれば論者本人に大きな助けとなると思われる。ここに推薦する次第である。

2010年10月25日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一

論文等テーマ 日本語「たら」文に対応する中国語の表現  
— 関連語の使用を通じて考察する —

著 者 名 于 吉 慧

論者は日本語の条件を導く形式のうち、最も使用制約が少なく、初級から教えられる形式であるタラを選び、これをテンス（未来・現在・過去）と実現確率（0%・50%・100%）との組み合わせで9種類に分類して、各分類項と中国語の複句（複文）（関連語を伴うことが多い）との対応関係を調査した。調査は日本語の小説3冊とその中国語訳により行われた。結果として、未来・現在・過去0と仮定複句の対応例、過去0と条件複句の対応例、未来・現在・過去50と仮定複句・時間複句の対応例、過去50と転折複句の対応例、未来・現在100と仮定複句・時間複句・譲歩複句の対応例、現在100と条件複句・因果複句の対応例、過去100と時間複句・転折複句の対応例があった。

使用したデータは日本語の小説と中国語訳であり、言語学的には厳密さを欠く部分もあるが、先行研究と異なり、タラをテンスと実現確率から体系的に9種類に分けて中国語と対照・考察している点に特徴がある。このような試みを実行し、結果を出したことに意義が認められるので、本論文集への掲載論文として推薦したい。また、このような方法での研究について識者からアドバイスを賜ることができれば本人の今後の非常に良い指針となるので、読まれた方のご高配をお願いする次第である。

2010年10月25日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一